

審議会等の会議結果報告

1 会議名	第8回津市子ども・子育て会議
2 開催日時	平成26年9月26日(金) 午後6時00分から午後8時35分まで
3 開催場所	津市役所4階庁議室
4 出席した者の氏名	<p>(津市子ども・子育て会議委員)</p> <p>市川律子、大山 航、川崎まり子、駒田聡子、田口鉄久、田中嘉久、 田部眞樹子、内藤直樹、堀内友裕、堀本浩史、森 崇、柳瀬幸子、 山川三重子、山田浩之、山中 理、脇ゆうりか</p> <p>(事務局)</p> <p>健康福祉部長 田村 学 健康福祉部次長 後藤忠久 子育て・こども支援担当参事(兼)子育て推進課長 谷口ひろみ 子育て推進課保育所担当副参事 平田恵美子 子育て推進課調整・子育て推進担当主幹 鎌田光昭 子育て推進課保育担当主幹 丹羽敬二 子育て推進課子育て推進担当副主幹 田口芳裕 子育て推進課主査子育て推進担当 米本孝子 こども支援課長 戸上喜之 こども支援課調整・こども支援担当主幹 橋本直樹 こども支援課主査こども支援担当 大野維佐子 健康づくり課保健指導担当副参事 藤井久美子 津市教育委員会事務局教育次長 川合陽一郎 津市教育委員会事務局学校教育課長 森 昌彦 津市教育委員会事務局学校教育課学校教育担当主幹 松谷富美子 津市教育委員会事務局生涯学習課青少年担当副参事 中谷初男 津市教育委員会事務局生涯学習課青少年担当主幹 笠井洋幸</p>
5 内容	<p>1 開会</p> <p>2 議事 (1) 津市子ども・子育て支援事業計画の策定について</p> <p>3 その他</p>
6 公開又は非公開	公開
7 傍聴者の数	1人
8 担当	<p>健康福祉部 子育て推進課 子育て推進担当</p> <p>電話番号 (059) 229-3390</p> <p>E-mail 229-3167@city.tsu.lg.jp</p>

## 第8回津市子ども・子育て会議 議事概要

### 1 開会

- ◆事務局(鎌田)が開会宣言
- ◆事務局(鎌田)が会議の成立を報告
  - ・出席者16名、欠席者2名、津市子ども・子育て会議条例第6条第2項の規定により成立

### 2 議事

- ◆田口会長が会議の公開を報告
  - ・津市情報公開条例第22条及び第23条の規定に基づき、公開審議とする
- ◆田口会長が資料の確認
- ◆田口会長が本日の会議の進め方を説明

#### (1) 津市子ども・子育て支援事業計画の策定について

- ◆事務局(谷口)が資料説明 【資料1】

##### <計画策定の姿勢について>

(田部委員)

「子どもの最善の利益」と絡めて、「子ども主体」という言葉を入れていただきたい。

(田口会長)

それは、「子どもの視点」、「保護者の視点」、「社会・地域の視点」のどこに入れるべきか。

(田部委員)

どこに入れるかは自分の中であまり明確でないが、子ども自身が権利主体であるという部分である。子ども主体が保障されれば、最善の利益が保障されることになる。

(田口会長)

「子ども主体」という言葉を、子どもの主体的な力を信じていくという意味で捉えれば、「子どもの視点」に入れるべきであるが、今ご説明があったような「子どもが第一である」という観点、いわゆる「Children First」の考えに立つと、「保護者の視点」、「社会・地域の視点」ということになる。

(田部委員)

ホットダイヤルに子どもからいじめの相談が入ると、県の教育委員会につなぎ、そこから市町の教育委員会へとつながれるが、その多くは、子ども主体の解決が行われず、大人側の論理で問題が収められてしまう。「いじめることはいけないことだ」「いじめるべきではない」という大人の論理で収められてしまうと、いじめは必ず違う形で大きくなっていく。そうではなく、子ども自身が相手と向かい合い、相手との関係の中で解決ができていくと、自分の中で納得がいく。その力が子どもにあることを社会が信じて、子どもと一緒に

に向かい合っていく、これが子ども主体である。それが結果的に子どもの権利の保障につながる。

(田口会長)

今の説明から、「子ども主体」は「子どもの視点」の中に位置づくというところが見えてきたように思う。子ども主体の考え方が貫かれていないと子どもの最善の利益につながっていないということで、「子ども主体」を「子どもの最善の利益」と並べる、あるいはつながるような表現で入れていただくよう、事務局で検討をお願いします。

◆田口会長が参考資料を読み上げ、全員で内容の確認を行った 【参考資料】

◆ここからは、田口会長がホワイトボードに板書しつつ議事を進めた

<基本理念について>

(田部委員)

子どもには育つ力があるというのが「子育て」の基本的な考え方であるが、子どもが勝手に育っていくようなイメージがなきにしもあらずである。子どもは一人では育たない。「子育て」には、適切な「子育ち」が必要である。

(田口会長)

いずれにしても、「子育て」と「子育ち」の問題は計画のどこかでは使われると思うので、文言の整理が必要である。これについては、前回、山中委員からもご発言があった。

(山中委員)

私が述べさせていただいたのは、「子育て」と「子育ち」は別物であるということである。前回の資料の中では、「子育ち」だけが表現されて「子育て」がなかったので、「子育て」と「子育ち」は併記すべきだという発言をした。

(田口会長)

「子育て」「子育ち」の概念の整理はいずれ必要になってくると思われるが、これは用語が使われる段階で検討するというので、その点を踏まえて協議に入っていきたいと思う。

(田部委員)

日本の子どもは目が輝いていない、顔が輝いていない。外国の子どもたちは輝いている。その輝きは何から出てくるのだろうといつも思うが、それはさせられていないからである。子ども自身が主体として役割を果たし、何かをする、それが子どもの時代から一人ひとりの中に保障されている。子どもの輝きは、そういうところから出てくるのだと思う。「輝き」という言葉をキーワードにしながら、子どもが輝くためにはどのようなことが必要かを考えていくことも一つの方法である。

(田口会長)

「輝き」という言葉は、私も好きな言葉である。

(堀本委員)

J-2の案は、「No. 1」という響きが印象的であり、かつ、具体的でわかりやすい。

「No. 1」を目標に掲げてしまうと責任は重いが、印象には残ると思う。

(田部委員)

私は、ひとりでも多くの子どもの「生まれてきてよかったのだ」「ここにいてよいのだ」、  
「自分の存在はOKなのだ」と思ってもらいたい。「生まれてきてよかった」ではない。「生  
まれてきてよかったのだ」である。そのために、私は残り少ない人生をかけていこうと思  
っている。

(柳瀬委員)

J-1に「オール津市で」とあるように、子育て支援をしている人や親子だけでなく、  
子どもを持っていない人や若者、高齢者など、すべての市民が子どもや親子に優しくあっ  
てほしい。「オール津市で」という言葉がよいかどうかはわからないが、皆が子どもを育て  
ることを応援している、子どもを応援して見守っているというフレーズがあるとよい。

(内藤委員)

Cの「約束します」という言葉は、非常にインパクトが強い。目標で言い切るのはどう  
かという気はするが、皆が目標に向けて頑張らなくてはいけないという気持ちを持つため  
にも、宣言してしまうことはよいことである。

(田部委員)

基本理念と基本目標は、今日この場で形にするのか。

(田口会長)

そのつもりである。ただ、ここで形にしたものがそのまま反映されるということではな  
く、再度検討等がかけられ収まっていくと考えていただきたい。

(脇委員)

Fに「多様な地域性を子ども・保護者が理解し」とあり、下の説明書きの中でも「合併  
したためさまざまな地域があり行政が良くも悪くも見えづらく」と書かれていて、津市ら  
しさという意味で、こういう視点がとても大事だと思う。

(田口会長)

それでは、まず基本理念を整えていきたいと思う。今までの意見等を勘案しながら、こ  
の基本理念でいったらどうか、あるいはこの理念にこのような言葉を乗せたらどうかとい  
うところがあったら、発言いただきたい。

(内藤委員)

「津」、「津市」という言葉は入れたい。

(柳瀬委員)

いくつかの基本理念の中に「つなぐ」や「つながる」という言葉が入っている。子ども  
を取り巻く横のつながりや縦のつながり、あるいは子どもが大人になったときに、次の世  
代を育みたいと思う気持ちがつながるという意味で、「つなぐ」、「つながる」という言葉が  
理念に入るとよい。

(田中委員)

この中でよいと思ったのが、Gの「願い」という言葉である。そして、田部委員が言われたような「子ども主体」の方向に向かっていくことや、柳瀬委員が言われた「つながる」、「つなぐ」ということで、だんだんアップグレードしていく、つむいでいくことが大事である。「つむぐ」という言葉が適切かどうかかわからないが、つむいだり、つむぎ直したりを繰り返すことで、だんだん良くなっていくという感覚である。

(田口会長)

「つむぐ」というのは、糸を織り成していくという意味合いもあり、縦糸、横糸という意味で考えると大変意味の深い言葉である。そして、「願い」も良い言葉である。

**【板書】**

子どもの輝き オール津 生まれてきてよかったんだ 津市らしさ 子育て・子育て  
約束します NO. 1 つなぐ つながる 願い つむぐ

(田部委員)

10年、15年先に法律が変わっても、「つながる」という言葉はその土台になっていくと思う。私は、子どものころからよく母に「あなたは鎖の一環なのよ」と言われてきた。母から私に、そして、次につながり、地域や社会などにつながっていく。今、この法律だけのためにこの問題を考えるのか、それとも、今の法律を土台にしながら、その先ずっと津市をどうしていくのかを見通しながら考えていくのかでは、言葉の使い方が違ってくる。次々につないでいくという意味では、やはり「つながる」という言葉は入れたい。「子どもの輝きをつむぎ、つながる」というように。

(田口会長)

「子どもの輝きを」という言葉を最初に持っていくとすると、「子どもの輝きをつなぐ子育て子育てのまち・津」というのはどうか。

(田部委員)

「子育て」「子育て」と言ったときに、「子育て」が先で、そこにとても重要な「子育て」がある。「子育て」がなかったら「子育て」はあり得ない。子どもが育つために、「子育て」「子育て」はキーワードとして入れたい。

(駒田副会長)

まず、輝きを出すための環境をつくることを基本理念に入れなければいけない。輝きを出す環境があって初めてつながるのだと思う。いきなり「輝きをつなげる」のは少し無理がある。

(田部委員)

「子育て」、「子育て」はつむぐことでもあるわけだから、「つむぐ子育て、子育て」というのはどうか。

(田口会長)

「つむぐ」という言葉は大変意味の深い、良い言葉であるが、今はあまり使われない。実際に紡ぐ作業が行われていないので、若い人が理解できるどうか。

(田中委員)

私の感覚にある「つむぐ」という言葉は、皆と同じ輪の中に入っていることが安心というのではなく、縦であり横であり、いろいろな人が交じり合って、いろいろな考え方があって、それがアップグレードされていくような感覚で捉えた「つむぐ」である。確かにイメージは古いが、それぞれの願いをつむいでいくことで輝くという考えである。

(協委員)

これから始まる子育て支援を子どもも親も楽しみにできるような、わかりやすくシンプルな表現がよい。子育て支援が全部そこにつながってくるようなシンボリックな感じにしたい。

(駒田副会長)

「つなぐ」は平面だが、「つむぐ」や「編む」は三次元である。それは非常に感覚的であり、読んだ人にどのように伝わるかわからないが、この会議の思いは二次元ではなく、三次元、四次元にあると思う。

(田部委員)

自分の体験から考えると、子育ては楽しくなかった。1歳2か月の子どもを連れて東京から三重に来て、孤立していく子育てだったからだ。そのとき、子育ては一人ではできないということを実感した。子育ては、皆で助け合い、迷惑をかけ合いながら、自分の子どもも他人の子どもも一緒に育てていくということがないといけない。人とつながって初めて子育てが楽しいと思えるようになるのである。子育てについて考えるとき、そうしたことが大事になってくると思う。

(大山委員)

「つなぐ」や「つながる」が具体的にどのような市の施策になるのかイメージできない。もちろん響きが良い言葉は必要だと思うが、津市の事業計画として、もう少し具体性があったほうがよいように思う。

(田口会長)

基本目標を達成するための具体的な施策を考えていく段階で、例えば、「つなぐ」というところを重視した施策が展開できるよう、この事業をもう少し手厚くしていこうという話になっていくと思う。

(田部委員)

「とぎれのない支援」や「連携をする」ということにもつながっていくので、「つながり」や「つなぐ」という言葉を基本理念に入れておくことは必要である。

(柳瀬委員)

私は、Aの「子どもの輝きが すべての人々の未来をつなぐまち」がよいと思う。子どもの輝きや笑顔は皆を幸せにする力がある。子どもの輝きをなくさないようにすることが、

社会を明るくする。大人が今の自分の幸せだけでなく、子どもたちの未来を考える、そのようなことを市民も企業も共有できるとよい。

(田口会長)

「子どもの輝きが すべての人々の未来をつなぐまち」には、先ほどから出ている「子どもの輝き」や「将来を見据えた」という意見が反映されており、言葉として大変落ち着いた理念である。今後、修正、あるいは大幅な変更も可能であることを前提に、ひとまず「子どもの輝きがすべての人々の未来をつなぐまち・津」を基本理念として掲げてみることにする。

(大山委員)

「未来をつなぐ」という言葉はイメージが湧かない。「未来につながる」ではないのか。

(山田委員)

「すべての人々」という言葉が「子どもの輝き」より重い気がする。津市のまちづくり計画ではなく、子ども・子育て支援事業計画なので、「すべての人々」という言葉は要らないように思う。「子どもの輝きが未来につながるまち・津」として、サブタイトルで「オール津」や「子育て」、「子育て」などを入れたらどうか。

(田口会長)

「子どもの輝きが未来につながるまち・津」、落ち着きがよく、響きもよい。そして、極めてシンプルであり、子どもが中心であることがよく表れている。サブタイトルについては、後の検討ということにしたい。

**【板書】**

子どもの輝きが未来につながるまち・津

**<基本目標について — 子どもの視点から>**

(田部委員)

例えば、「子どもの最善の利益」というまとめ方でもよいのか。

(田口会長)

「子どもの最善の利益」は、市民にとって馴染みのない言葉であり、どのように受け止められるか。できれば、誰もが理解しやすい、平易な言葉のほうがよい。

(堀本委員)

Bの「子供が自ら育つ力」という考え方はよい。

(田口会長)

「自ら育つ力」を大切にしたいという考え方は、B以外にも、Hの「子どもたち自身の育ちを支援します!」、Iの「子どもたち自身が育つ子育てを支援します!」がある。

(田部委員)

Bの「聞く」は、「聴く」という表記のほうがよい。音を聞くほうの「聞く」ではなく、

相手と共感しながら傾聴するという意味の「聴く」である。子どもを対象としたアンケート調査の結果を見ると、「大人は聴いてくれない」という声かなり多い。子どもが自ら育つ力を支援するためにも、子どもの声を聴くことが大切である。

(大山委員)

基本目標の具体性がどれぐらいあるべきなのか確認したい。「支援します」や「応援します」という言い方と、具体的な「聴く」という動作との間にはレベルの差があるように感じる。「子どもの声を聴く」という具体的な動作を示す言葉は、基本目標の中に文言として入れるべきか、それとも、もう一段下の具体的な施策の中に入れてくるべきものか。

(事務局 谷口)

基本目標があまり具体的になると、施策を入れ込むのが難しくなるので、ある程度大きな括りで様々な事業を入れ込んでいける形にしていきたい。

(事務局 田村)

ここでの議論は、制約なしで自由に発言いただければよいと考える。ただ、大山委員がおっしゃるように、目標を掲げれば、それを実現するためにその後ろへ施策をぶら下げていくことになるので、目標の中に手段的なことが入ってくると、その下に施策をぶら下げにくくなるかもしれない。皆様に集約していただいたものを事務局なりに消化し、場合によっては、「この部分は反映しづらい」とお返しすることもあるだろう。しかし、そういうことを一度全部取り払って議論いただくほうが、良いものが出ると思う。

(田部委員)

そうしないと、勝手なことが言えない。ここは、勝手なことを言わせていただく場だと理解している。そうして出た意見を反映する、反映しないという判断は、事務局にお任せする。

(田口会長)

子どもの自らの育ちを大切にしていくという観点で書かれたものは、この3つである。このうちの1つを基本目標として掲げる方向で整えていくという作業をしてよいか。

**【板書】**

- ・子どもが自ら育つ力を支援し、子どもの声を聴き、一人一人を大切にする
- ・子どもたち自身の育ちを支援します
- ・子どもたち自身が育つ子育てを支援します

(駒田副会長)

確認だが、Bの「社会的養護が必要な子供、貧困の子供、障害がある子供等への支援」の「子供」は、「子供」という言葉でよいのか、それとも、「すべての」を入れたほうがよいのか。

(田口会長)



漢字で「子供」と書いてあるものもあれば、「子ども」のあとに「たち」を入れているものと、「子ども」だけで留めているものがある。用語については事務局で調整していただくと思うが、今のところは、「子どもたち」というのは子どもを表しており、「子ども」だけで子どもが複数であることを表しているということで、「たち」は削ることにする。なお、平仮名のほうが優しい感じがするので、「子ども」という表記でいきたいと思う。

(駒田副会長)

そうではなくて、「すべての」が要るかどうかである。

(田部委員)

基本は、「すべての」というのである。それで当然だというものの考え方になっていけないといけない。その中に、特別に支援しなければならない子どもがいるという考え方である。

(田口会長)

ここでいう「子ども」は、「すべての子ども」と捉えていくことにする。

(田部委員)

子どもはお供ではないということで、私たちの団体は「供」という字は使わない。必ず「子ども」と平仮名で表記している。

(駒田副会長)

保育の現場でも「供」は差別的用語として扱われており、教科書もすべて平仮名表記になっている。

(田口会長)

この3つのうちで、どれを基本に考えたらよいか。2番目と3番目はよく似ている。1番目は少し丁寧いろいろなことを表現している。

(柳瀬委員)

先日、名古屋で開催された子ども虐待防止世界大会に参加した。その中で、子どもが一番言いたいのは、「自分たちの声を聴いてほしい」ということだった。子どもは、大人が考える以上にしっかりしている。まずは、子どもの声をきちんと受け止める姿勢を社会が持つことが必要である。

(田部委員)

「子どもの声を聴く」というのは、一人ひとりに何かを聴くということではなく、子どものニーズを把握するという意味でもある。それは、施策を作っていくうえでの基本となるものである。

(大山委員)

子どもの声だけでなく、保護者や地域の声も聴く必要がある。「子どもの視点」に「子どもの声を聴く」と入れると、「保護者の視点」でも「保護者の声を聴き」と入れざるを得なくなり、文章がどんどん長くなっていく。「声を聴く」ということを重要視するのであれば、「皆の声を聴く」という基本目標を立て、一つ一つをシンプルに掲げたほうがよりメッセージ性が強まるのではないか。

(田口会長)

今、論議しているのは「子どもの視点」に立ってというところである。

(大山委員)

視点を越えたところで、「皆の意見を聴く」という柱立てをしてはどうかということである。

(田口会長)

サブタイトルのような形で、基本理念のほうに載せるということによいか。

(大山委員)

それは少し違う。しっかりとニーズを把握するという意味で、「聴く」という言葉を基本目標の中に入れるべきではないかということである。基本目標を「子どもの視点」、「保護者の視点」、「社会・地域の視点」に区切って作らなければならないという決まりはないと思う。

(田口会長)

決まりはない。だが、市が基本的な考え方として「計画策定の姿勢」を出しているので、これと連動したほうがよいだろうという考え方である。基本理念のタイトルとしてではなく、テーマ設定や基本目標を掲げる基本として、子ども、保護者、地域といったそれぞれの立場の声をよく聴くという内容を入れることでどうか。

(大山委員)

ならば、「子どもの声を聴く」ということを基本目標に入れる必要はないのではないか。

(田部委員)

ニーズという言い方をしたので、誤解されているように思う。子どもは、常に客体である。子どもを主体にするには、子ども自身から発してくることが基本である。それをいちいち子どもに「あなたはどうか考えるのか」と聴くことではないという意味で、ニーズという言い方をした。大人の声はいくらでも届くが、子どもの声は大人が代弁しないとなかなか届かない。子どもの場合は、あえて目標の中に「子どもの声を聴く」ということを入れる必要がある。

(田口会長)

「子どもの声を聴く」というのは、子どもの本当の思いや願いを理解していくという意味合いも含まれる。大山委員のご指摘の点については、施策を反映していくうえで、それぞれの思いを大切にしていこうという中で触れることにし、基本目標としては、1番目の「子どもが自ら育つ力を支援し、子どもの声を聴き、一人一人を大切にする」を基本にしながらか進めることにしたい。「一人一人を大切にする」という表記によいか。

(脇委員)

文章の前後を入れ替えて、最後が「育つ力を支援します」としてはどうか。

(田中委員)

私どもの保育所では、言葉を持たない0歳児を見ながら、この子は何をしたいのか、何

を言いたいのかということの総称として「願い」という言葉を使っている。言葉を発する年齢になっても、その言葉の中の願いを感じ取ることが大事だと考えている。「声を聴く」ではなく、「願いを聴く」。言葉の中にある願いや思いを聴いて、施策に活かしていくことが必要である。

(田口会長)

「聴く」はこの漢字でよいか。「一人一人を大切にする」ではなく、「大切にします」としたほうが、親も社会も行政も責任が出て、意味がより強く出ると思う。それでは、一つ目の目標は、「子どもが自ら育つ力を支援し、子どもの願いを聴き、一人一人を大切にします」とする。

**【板書】**

子どもが自ら育つ力を支援し、子どもの願いを聴き、一人一人を大切にします

(田口会長)

Iに「すべての子どもが質の高い教育・保育を受けられる環境を整えます！」という言葉が出ている。これは、今回の事業の大きな柱であり、大きな課題であると思う。

(田部委員)

「質の高い」というのが具体的にどういうことかわからない。今の学校教育の詰め込み主義が質の高い教育とは思えない。ニュージーランドでは5歳になる日が入学の日であるが、5歳児に対しては、知育教育は行われない。子どもたちが将来きちんと主体を確立しながら生きるための力をつけ、人間を成熟させる土台をつくるということの質が高い。

(川崎委員)

一つ目の目標の「子どもが自ら育つ力を支援し」という中に、「質の高い教育・保育の環境づくり」も含まれると思う。

(田部委員)

津市としてどのような教育・保育プログラムを作っていくのか。綿密なプログラムが必要である。

(田口会長)

教育・保育の質の問題は、園によって、保護者によってそれぞれの考え方があるので、大変難しい問題である。しかし、質の高さというのは、皆で納得できるものを考えていけると思うので、それを追求することは大事なことである。

(田部委員)

確かに、教育・保育の問題は今回の子ども・子育て支援事業計画のポイントの一つでもある。

(田口会長)

そのとおりである。教育・保育に関連する施策は多い。保育所、幼稚園だけでなく、小

規模保育などの地域型保育や、学童保育も場合によっては含まれてくる。

(田部委員)

「質の高い教育・保育の環境づくり」を目標に掲げておくことで、それにぶら下がる施策が考えやすくなるかもしれない。

(大山委員)

保護者のニーズは多様であり、「質の高い教育・保育」がどのようなものを指すか明確になっていない。代替案が思い付かないが、もし、この基本目標を掲げるのであれば、「質の高い教育・保育」という文言は言い換えが必要である。

(協委員)

私の中では、子どもの成長や生活環境といった多様な環境に応じた支援というイメージである。ひとり親家庭の子ども、障がいを持っている子ども、共働き家庭の子どもなど、多様な家庭環境に応じた支援、あるいは乳幼児から高校生くらいまでの各年齢に応じた支援が受けられる環境づくりが必要である。

(田口会長)

それをまとめると、「すべての子どもがそれぞれの環境に応じた支援が受けられる環境を整えます」となる。「環境」という言葉が続くので、調整が必要だ。

(田部委員)

初めの「環境」を抜いて、「それぞれに応じた支援が受けられる環境を整えます」としたら、つながっていく。

(田口会長)

様々な子どもということになると、「それぞれの環境に応じた」という文言は必要である。二つ目の目標は、「すべての子どもがそれぞれの環境に応じた支援が受けられるようにします」とする。

**【板書】**

すべての子どもがそれぞれの環境に応じた支援が受けられるようにします

**<基本目標について — 保護者の視点から>**

(内藤委員)

保護者の視点から考えると、「子どもが安心・安全に育つ」、「子育てしやすい」といったところが表現されるとよい。

(田部委員)

親は子どもにとって最大の環境であり、最大の教師であり、最大の存在である。その自覚がない親が多い。子育ての文化の継承がとぎれ、子育ての仕方がわからない親がたくさんいる。だから、今、親が育つプログラムが求められている。外国には、「N o b o d y ‘ s P e r f e c t」という子育て中の親支援プログラムがある。日本にも入ってきており、

三重県子どもNPOサポートセンターでも「ハローベビープログラム事業」など、様々な取り組みを行っている。親を具体的に支援していくことが必要である。

**【板書】**

子どもが安全に育つ

子育てしやすい

保護者が子育てできる親支援

(駒田副会長)

私自身、親の立場として親支援の目標にしてほしいのは、J-2の「親になってよかった、子育てしてよかったと思える子育て支援をします」である。さらに、ここに「とぎれのない」という言葉を付け加え、「とぎれのない子育て支援をします」としていただきたい。とぎれのない支援により、結果として子どもを受け止めていける親になっていくと思う。

(田部委員)

良い妊娠期があることが良い出産につながり、良い子育てにつながっていく。

(駒田副会長)

子どもと一対一していると気持ちも疲れてくる。ネグレクトの原因もそこだと思う。親が子育てしてよかったと思えるような支援が必要である。これは、母性の問題だけではないと思う。

(田部委員)

私も同じような気持ちになった経験がある。

(大山委員)

子育てするのは親だけなのかということが少し引っ掛かる。「親」という言葉の強調には注意が必要である。個人的には、次世代育成支援行動計画の基本目標の「子育てを育む家庭を支援します」がよいと思う。

(田部委員)

子育てを家庭を支援するという事は、親を支援することである。

(大山委員)

家庭の中で子育てをしているのは親だけではない。「親」という言葉を強調するのではなく、家庭を支援するという視点が必要である。

(柳瀬委員)

普通に子育てしている親が大半だが、中には、特定妊婦と言われる、親としてうまく子育てできない人もいます。それは、その人だけが悪いのではなく、社会的背景や育ってきた環境の影響があり、「育てられないあなたが悪い」と言うだけでは何も解決できない。昔はおじいちゃんやおばあちゃんに子育ての仕方を教えてもらったものだが、今は核家族となり、自分ですべて考えなければならない。このような状況の中で、親の支援というのはこ

れから絶対に必要になると思う。親になってよかったと思えない人に対して、「思えないあなたが悪い」と言うのではなく、そう思えない背景を支援する必要がある。

(田部委員)

親を支援するのは社会である。親が親を支援するわけではない。行政も含めて社会全体で支援していくためにどういう施策を講じていくか。「親になってよかった、子育てしてよかった」と思える支援のあり方について、地域社会や行政がどう取り組むかという次の段階に移っていくことになると思う。

(脇委員)

「親が、家庭が子育てしてよかったと思える」という言い方はどうか。

(田部委員)

この「親」は、親個人ではなく、それ自体が「家庭」という社会を指している。「親＝家庭」という考え方でよいのではないか。

(大山委員)

親が亡くなり、おじいちゃん、おばあちゃんが親代わりとして子育てしている家庭もある中で、「親」という言葉を基本目標の中に入れてしまってよいものか。様々な家庭状況への配慮が必要である。

(田口会長)

少数であってもそういうお気持ちになられる方があれば、配慮が必要である。「親になってよかった」という言葉はもう少し検討したほうがよいように思う。

(大山委員)

そういう意味では、先ほど脇委員が言われた「親が、家庭が子育てしてよかったと思える」という言葉の使い方はよいと思う。

(脇委員)

「家族が」という言い方もある。

(森委員)

「親の視点」ではなく「保護者の視点」という括りで考えており、文章もすべて「保護者」という表現になっているので、基本目標だけ「親」という表現にするのはどうかということだと思う。

(田口会長)

要は、子どもが家族の中に誕生してくれてよかったということである。

(田中委員)

「子どもと出会えてよかった」「子どもを授かってよかった」「子育てしてよかったと思える親・家庭支援」ということだと思う。

(駒田副会長)

「授かる」は、私たちを超えた存在から授かったものという宗教的な意味合いが強いように思うので、「出会えて」のほうがよい。

(森委員)

親がいない子どものことを考えると、「出会えて」のほうがよいように思う。

(山中委員)

そもそも子ども・子育て支援三法ができる前提として、少子化対策がある。少子化対策は親抜きでは考えられない。そういう意味では、「子どもを授かる」という語句は「出会える」よりインパクトが強いと思う。

(柳瀬委員)

里親制度などもあり、自分の子どもだけでなく、他人の子どもでも誰でも受け入れられるキャパシティが必要である。

(田中委員)

山中委員が言われる少子化の問題は、私も日頃感じている。このまちで子どもを産み育てるといふことと併せて、市外、県外から見て、津市が住みたいと思える魅力あるまちになり、人口増に向かっていくような施策が必要である。外の保護者の視点を入れると、少子化対策にもつながっていくのではないだろうか。

(協委員)

Aでは、基本目標からさらに派生していくつかの項目が立てられている。少子化の問題などは、そういった枝葉の中でフォローしてはどうか。

(田部委員)

少子化対策は経済的な問題とも関連が深く、こういうところだけではどうすることもできない。

(田口会長)

少子化対策等については基本目標のあとに続く施策の中で対応するというところで、事務局にお任せしたい。

**【板書】**

子どもと出会えてよかった、子育てしてよかったと思える、とぎれのない子育て支援をします

**<基本目標について - 社会・地域の視点から>**

(田部委員)

「社会・地域の視点」に学校は入るのか。

(田口会長)

学校は、「子どもの視点」の中に含まれていると思う。

(田部委員)

子どもの生活の場は、家庭と学校と地域である。今、その中の地域がなくなってしまう。地域をどう再生していくかが大きな課題である。

(駒田副会長)

地域と言うとコミュニティというイメージがあるが、J-1にあるように、「企業」という視点をどこかに入れるべきである。

(田部委員)

子どもを育てるときに、今の企業の働き方では育てられない。働き方の問題抜きに、子育てを考えることは有り得ない。

(田口会長)

今言われた視点を含んだ考え方が大事だということになると、J-1の「市民、地域、企業も一緒に、オール津で子どもを育てるまちづくり」、J-2の「市民も地域も企業もひとつになって子育てしやすい環境をつくります」がそれに当たる。ここだけに「オール津」を入れるとバランスが崩れるので、J-2のほうが落ち着きがよいように思う。

(駒田副会長)

「も」を入れないで、「市民・地域・企業」とするほうがインパクトが強い。

(田部委員)

J-1の「子どもを見つめる、子育てに寄り添う社会」というのも、言葉としてよいと思う。

(駒田副会長)

J-1の「子どもを育てる」か、J-2の「子育てしやすい」か、どちらの文言が当てはまるだろうか。

(堀本委員)

Fの「多様な地域性」と、Bの「多様な価値観」という言葉を入れていただきたい。子どもたちが地域に出て、いろいろな大人と出会って、いろいろな価値観に触れ合うことが大事である。また、津市は合併し市域が広がったこともあり、多様な地域性という視点がどこかに入れればよいと考える。

(田部委員)

今、子どもたちが育っていく中で、斜めの関係、つまり、地域の大人との関係が切れている。

(田口会長)

ここに「多様な地域性」、「多様な価値観」という言葉を入れるのは難しい。下位の項目として、あるいは説明の中で、それを入れていくことにしたい。「市民も地域も企業もひとつになって」と「市民・地域・企業がひとつになって」、どちらがよいか。「・」で区切るほうがよければ、「市民・地域・企業もひとつになって」ということにしたい。

(田部委員)

市民、地域、企業という順番は、これでよいか。

(大山委員)

企業だけだろうか。行政もあるし、企業ではない職場もある。



(田部委員)

行政は、あえて言わなくても大前提である。

(大山委員)

言葉の表現上の問題である。働く場としては私企業だけでなく、事業所などもあるということである。例えば、私は大学に勤めているのだが、企業ではないので配慮してもらえないのかと少し残念な気持ちになった。

(田口会長)

「企業・事業所」と並べるか。それとも、「団体」とでも入れるか。

(山川委員)

家庭、地域、ボランティア、企業、行政など社会全体を含めて「地域」である。

(田口会長)

ご指摘のように社会全体を表したいわけだが、「社会がひとつになって」と言うと大雑把すぎる。

(堀内委員)

「津市が」、「津全体が」、「津の人が」というのはどうか。

(駒田副会長)

大学やボランティア、保育所などは、どちらかという地域コミュニティの一つである。私の中では、企業は利益を追求するところというイメージが強い。利益を追求する私企業も一緒になって子育て支援に取り組んでもらいたいという意図を持って、あえて「企業」を入れるべきである。

(田中委員)

子どもも一市民として捉えるならば、市民も地域も企業もひとつになって、利害関係をなくして新しいコミュニティをつくっていくという方向になると思う。

(脇委員)

あとに続く施策を考えると、「企業」というよりは「職場」のほうがよいように思う。

(駒田副会長)

「職場」というと「場」である。ここは、やはり「企業」とすべきだと思う。

(田口会長)

文言の決定については、事務局に委ねることにしたい。「行政」という言葉はどうか。大前提なので入れなくてよいか。

(柳瀬委員)

私は、「行政」を入れたいと思う。これまでは行政に何かをしてもらう形が一般的であったが、これからは行政も企業もみんな横並びで社会貢献する社会になってもらいたい。

(田口会長)

「子どもを育てる環境」と「子育てしやすい環境」、これについても決定は事務局に任せることにはしたい。

**【板書】**

市民・地域・企業・行政がひとつになって子育てしやすい環境（子どもを育てる環境）をつくれます

**<全体を通して>**

（田中委員）

漢字にするか、平仮名にするか、文言の表記についても検討をお願いしたい。

（山田委員）

次世代育成支援行動計画から子ども・子育て支援事業計画へと、基本目標がどのように引き継がれ、移っていったかがわかるような形で整理したほうが、市民にはわかりやすいと思う。

（田口会長）

会議の中で意見が反映しきれなかった点があったと思うが、内容説明等で反映されていくことを願っている。

**3 その他**

（事務局 谷口）

今回の会議は、10月20日の18時から庁議室で開催する予定である。

（田口会長）

今回の会議内容とその後の動きについて、わかる範囲で教えていただきたい。

（事務局 谷口）

今回は、本日まとめていただいた基本理念及び基本目標を基に事業計画の骨子案を提案させていただくので、それについて審議をお願いしたい。その後、骨子案について、11月に議会に付し、さらに、市民へのパブリックコメントを求めるという流れになる。

（田口会長）

これをもって、本日の会議は終了とする。